艦隊悪堕ち計画2
堕ちた艦娘はもうもどらない

「んんぅ～…っ、えっ？えっ！？な、何で私こんな格好に、それにあなたは誰！？」
「えっ、頭の中を書き換えてる途中！？なにを言って…」
「ひゃっ！手が勝手に、んっあんっ、それになんだか体が熱く…」
ドクッ
ドクッ

「えっ！？うそっそんなの入らな…っ」
「ひあぁっ！なにこれ、痛いどころか気持ちいいっっ！？」
「やぁんっ、そんなに激しく突かないで、私気持ちよすぎてコワレちゃう！」
ビクッ
ビクッ
ずぷぷぷぷ

『今度はにゃに？、しょれで私の頭の調整を完了しゃせりゅ！？』
『もうだめぇ、カラダに力が入らにゃい…お願い、やめてぇ…』
（私…もうダメなのかな？…ビスマルク姉さま…アドミラール…）

『んっはあああああんっ、にゃにこれ！？」
頭の中グチャグッチャになりゅっ！」
「やめて…私の中イジらないでっ…大好きな人たちの記憶まで変えないでっ…』
「私が好きなのは…あれ？…スキなのハ…」

キーン
「私が好きなのは、ご主人様だけです♥」
「アドミラール？誰ですそれ、それよりご主人様！
もっと私をご主人様好みの淫乱な娘に変えてください♥」
「ああっこの体の中から暖かくなる感じ、素敵です♥」

キーン
キーン
「わぁっ、これが新しい私♥ご主人様、ダンケ、ダンケ♥」
「では改めて、グーテン モルゲン、
私はご主人様専用肉奴隷、プリンツ・オイゲン。末永くよろしくね♥」
「早速、私の膣内で大きくなってるご主人様の主砲をご奉仕するね♥」

「あぁんっ、どうです私の膣内は？
まだ慣れてないからちょっと不満かもしれないけど、
そのうちご主人様の形になって
最高に気持ちよく出来るように頑張る！」
「はぁんっ♥やぁんっ♥もし出ちゃいそうなら体にかけてね♥
あんっ♥まずはご主人様の匂いを覚えたいから♥」
「ファイヤー！、ファイヤー！」
じゅぽん
じゅぽん
じゅぷぷっ

「ひゃぁぁぁぁんっ♥あったかーい、スンスン、
はぁ～これがご主人様の匂い…最高♥」
「それに、ゴクッ、味もとっても濃厚で美味しい♪」
「いっぱい出たねご主人様♥ダンケ、ダンケ♥」
ぞくッ♥
ぞくッ!♥
どろぉぉ..

「この後どうします？今度はお尻でしてみます？…えっ頼みごと、なんです？」
「ほぉ、ほぉほぉ、なるほどねぇー。
ビスマルク姉さまの調整もするから手伝えばいいんですね♥」
「了解です！ンフフっビスマルク姉さまも
私と同じご主人様専用肉奴隷になるんですね、楽しみ♥」

「な、なんなの、この状況!?くっ体が動かない」
「確か私はプリンツと一緒に出撃してそのあと…」
「そうだ、プリンツは?あの娘は?」
「ハーイ、ビスマルク姉さま!私ならここにいますよー♥」
!!?

「プリンツ!?あなた無事だったのね」
「はい♥ご主人様に大変良くしていただいてます!
それにこんなにも素敵な姿にしてもらって♥」
「え、あなた何を言って…」
ポッ
「ご主人様がビスマルク姉さまも欲しいって言うから
私もお手伝いしにきました♥」
「またビスマルク姉さまとご一緒できるなんて、
私とってもうれしい♥」
ぴくっ

「じゃあまずは、ご主人様のオチンポを入れやすいように
ビスマルク姉さまのココ、舐めて濡らしますね♥」
「ひゃ！プリンツ！あなたどこを舐めてるの！？」
「れろれろ…だって濡らしておかないと、
ビスマルク姉さまが痛い思いをしますよ？
私としては無理やり突かれて泣き叫ぶ
ビスマルク姉さまもみてみたいけど♥」
「ちゅぱ…そろそろいいかな？どうぞ、ご主人様♥
ビスマルク姉さまのトロトロオマンコに
ご主人様のオチンポを入れてあげてください♥」
「嘘でしょ…そんなの入わけ…それに私はまだ処女なの！
こんな初めてなんてイヤよ！！」
ぺろぺろ♥
ちゅぱ
ちゅぱ
!!

「はうっ！いっ痛っ…くない！？」
「えっ！？うそっ？なんで…私、まだ誰とも…」
「あはは、ビスマルク姉さまは覚えてないと思うけど、ビスマルク姉さまはもうご主人様に何十回も抱かれてるんですよ？」
「体は完全にご主人様専用に変えられちゃってるから、あとは頭の中を変えてあげれば私と同じになれますよ♥」
「うそよ、そんなはず…あんた許さない！絶対に殺してやるんだから！」
ぢゅぷん

「はぁー、ご主人様を悪く言うビスマルク姉さまは嫌いです…」
「ご主人様♥早くビスマルク姉さまの頭の中を改装しちゃいましょ♥」
「なにこの触手!?やめっ!あああぁぁぁぁっ!」
「頭の中がグチャグチャに!なにこれ!?気持ちいいいっ!」
「そうでしょ、そうでしょ♥どんなに強がってもこれには絶対かなわないんですよ♥」
ぬぷぷぷぷぷっ…

「いやぁあ！これダメ…なにも考えられなくなる…」
「あは♥姿が変わってきましたよ、もう少しですね♥」
「ビスマルク姉さま？ビスマルク姉さまが忠誠を誓うのは誰です？」
「私が忠誠を捧げるのは、アド……」
ニヤ
ニヤ
ヤーン
「もう一度聞きます、ビスマルク姉さまが忠誠を誓うのは誰ですか？」
「私が忠誠を捧げるのは…」

「ご主人様に決まってるじゃない♥」
「わぁ、ビスマルク姉さま♥やっとわかってくれたんですね♥」
「ええ、あなたのおかげよプリンツ♥一時期とはいえ、あんな軟弱な男に忠誠を捧げてた私がなさけないわ」
「でもこれからは、ご主人様だけよ♥ビスマルクの名に誓って永遠に忠誠を尽くすわ♥だから私をいっぱい使いなさい♥」

「あぁあんっ激しい♥いいわ、最高よ♥
ご主人様はどう？私のおマンコの具合は？」
「フフッあたりまえじゃない。良いのよ？もっと褒めても♥
「ああ、ビスマルク姉さま気持ちよさそう…
ねぇご主人様、次は私のオマンコも使ってみませんか？」
どくっ♥
どくっ!!♥
ズボッ
ズボッ
グチュ
「んんぅ、ダメよ、あなたは散々可愛がってもらったんでしょ？
しばらく私に譲りなさい！」
「うぅっ…じゃあ、
せめて射精するときには私にもかけてください♥」

「はあああんっ♥出てるわ！
ご主人様の熱いザーメンが私たちに…♥」
「んんぅっ♥やっぱりご主人様のザーメンは
とってもいい匂いです♥」
キュンキュン
ドクドクッ！！！
「あんっまだ大きいままね♥
しゃあ次はこのオチンポを咥えてあげる♥プリンッ、
あなたはご主人様のタマタマを舐めてあげなさい♥」
「はい！ビスマルク姉さま♥」

「これからいっぱい、
私たちを使って気持ちよくなっていいのよご主人様？♥」
「私たちは身も心もご主人様に捧げた、
ご主人様専用肉奴隷なんですから♥」

「お、提督、目が覚めたんだ、チーッス」
「え、なにしてるかって？そんなの見ればわかるじゃーん、あ・し・こ・き♥」
「だって鈴谷、しばらく長期出撃に出てて、
提督も鈴谷の甲板ニーソが恋しいんじゃないかなーと思ってさ♥」
「ほれほれ、そんなのどーでもいいじゃん！
それよりそのオチンポもっと擦ってあげるね♥」

「ん、どう、鈴谷の足テク？なかなかのもんでしょ！」
「ほら、甲板ニーソの生地と鈴谷の柔らかい足裏が擦れて最高だよね♥」
「そういえば、提督の友達の鎮守府ってさぁ、次の出撃でどこを攻めるか知ってる？」
「ねぇねぇ、鈴谷にだけ秘密で教えてよー、誰にも言わないから♥」
ニコニコ
ニコニコ

「ふむふむ、なるほどねー、あそこを攻めるつもりなんだ」
「ありがと、提督♥お礼に足コキのスピード上げてあげるね♥」
「ほら、いつでもイッていいよ、鈴谷の甲板ニーソにかけていいからね♥」
ニヤッ

「あん、出た出た、白くてヌメヌメしたのがかかってる♥」
「んもーいつでもいいって言ったけど早すぎッしょ、マジ良かったの？鈴谷の足コキ♥」
あは♡
ビュルル
「あったり前だよー、だってご主人様にいっぱい躾けてもらったんだもーん♥」

「え？誰の事かって？んー、実はさぁ、
鈴谷長期出撃してる時に敵に捕まっちゃったんだよねー」
「で、そこで出会ったのがご主人様♥
自分の艦娘にするって無理やり鈴谷の処女を奪って」
「その後もひたすらセックス♥
いつの間にかご主人様なしじゃイケない体にされちゃったんだ♥」
ニヤッ
ニヤッ

「なに？信じられないの？だったら証拠みせてあ・げ・る♥」
「おニューの姿に変わるとき最高にテンションがあがるんだよねー♥」
「さあ、提督の知ってる鈴谷とお別れだよー！」
キーン

「あぁん♥どうこの姿、めっちゃエロいっしょ♥」
「提督さっき足コキされてるとき、鈴谷のパンツちらちら見てたっしょ？
でももう提督は鈴谷とセックスすることは一生ないんだどね♥」
「鈴谷はもう提督の艦娘じゃなくて、ご主人様専用の女になったんだもん♥」
「それにもし機会があっても、こんな早漏チンポじゃ、
鈴谷のこと満足させられないじゃん♥」

「はぁ？なに、こんなに言われてるのにまだオチンポ大きいままなの？
提督、実はMだったんだ！きっも～☆」
「早漏な上にドMの変態なんて、もう誰も相手にしてくれないね」
「かわいそーだから、最後に鈴谷の足コキで死ぬまでイかせてあ・げ・る♥」

「ほらほら～いっぱい踏みつけてあげる♥
勢いあまって踏みつぶしちゃったら……まあ諦めてね♥」
「そそ、さっき教えてもらった友達の鎮守府の情報、
早くご主人様に報告しなきゃ行けないから、とっとと出しちゃってよ♥」
「しっかし最低～だよね～、艦娘一人も満足させられないうえに、
友達まで裏切るなんて☆」
「もうゴミクズ以下だよね、早漏マゾ提督♥」

「うわ、さっきより多い！どう、罵倒されて気持ちよかった？あははっきっも～☆」
「ふひひひっ♪じゃあまだまだつづけるよー♥」
「ん、なに？イッててもぜんぜんだめだよ☆
だってさっき言ったじゃん、『死ぬまでイかせてあげる』って♥」
「鈴谷の足で死ねるなんて、提督は最高に幸せだよね♪」
ビクンビクン

「提督、おはようございます。え？なにをしているのかですか？」
「先日、お友達の提督が行方不明になってしまって
提督が落ち込んでいたので慰めに来ました。ダメ…でしょうか？」
ぷるっ

「それでは、フフッ、提督は皮被りなのね♪
いえ、かわいいですよ、とても？」
「んっ熱いですね。私のおっぱい、やけどしそうです♪」
「それにすごく濃い匂いがします、ずいぶんたまってますね♪」

「では、始めますね。んっどうですか、私のパイズリは？」
「提督、おっぱい好きですものね♪
いつも私のおっぱいちらちら見てたでしょう？」
「あんっビクッてはねた♪もうでちゃいそうですか？
だったらもっと激しくしちゃいますね♪」
ムニュ♥
ムニュ♥

「ああんっ出てます～フフッそんなによかったですか？」
「えっ、外がなんだか騒がしい？
フフッそんな事気にしなくてもいいんですよ？」
「あっダメですよ提督、提督はご主人様が仕事を
終えるまでここで私と一緒にいるんです」
ぬーちゅあぁ

「どうしたんですか、提督？顔が青くなってますよ？」
「フフッご明察の通りです、今この鎮守府には
提督のお友達の鎮守府を壊滅させたお方が来ています」
「そして、私の任務はご主人様が動きやすいように
提督をここで動けないようにすることです」
フフッ♥

「ダメですよ、提督？大破進軍なんて事をいつもしてるから、
みんなの心が離れていってこんな風に寝取られちゃうんですよ？」
「でも、しょうがないですね、
どのみち提督じゃ指揮能力もおちんぽの気持ちよさも
ご主人様には勝てないんですから」
「さあ、私の生まれ変わった姿で搾り取ってあげます？」
ドーン

「フフッどうですか？とてもエッチでしょう？」
「あら？ずいぶん元気ですね、提督のココ？
あなたの部下達が今まさに慰み者にされているのに
ひどい提督ですね」
「そんなに興奮しちゃいましたか？私の姿？」
ニヤッ
ニヤッ

「今度はお口も使ってあげますから、
とっとと出しちゃってください。」
「れろ、れろっ……じゅっぷ、じゅる……れろっ！
れぇ～ろ……れろろんっ、れぇろん、ちゅぱっ」
「ちゅぱっ……ちゅぱぱっ、
ジュボジュボッんちゅ、ちゅ……ちゅぱっ」
ちぱっ
ちぱっ
じゅぽっ
じゅぽっ
ぶるん
ぶるん

「ちゅぱ…ちゅぽ…ん、んぐ、ごくごくっ……
ちゅるるっ……ぷはぁ」
「フフッ皮被りのダメオチンポのわりに味はなかなかですね」
「これだったら、みんなの性欲処理機くらいには
なれると思いますよ？」

「よかったですね提督？新しい仕事が見つかって？」
「あなたの部下だった娘達に死ぬまでもてあそばれて、ボロ雑巾みたいに捨てられるんですよ？」
「まあ、私は使いませんけど？」
くちゅっ
くちゅっ

「いや、何するんですか、提督!?」
「私はただ、姉さんたちを助けたくて救援隊をお願いしただけなのに…」
「えっ?提督を気持ちよくしたら救援隊を出していただけるんですか?」
「ぐすっ…わかりました…」
ポロ…

うう…
「これを擦ればいいんですよね？」
「ううっ信じてたのに…まさかこんな事をする人だったなんて…」
「んっ、あんっ提督さんのが、私のに擦れて…」
「私はどうなっても構いません、ですから姉さん達を助けてあげてください！」
すり
すり

「ひゃっ、熱くてベタベタしたのがかかってます…」
「それに臭いも…」
「司令官さん、約束です！姉さん達の救助隊を出してください……えっ！？」
ビュッ

「姉さん達はすでに敵に寝返ってるから救援は出さない!?」
「約束が違うじゃないですか!では、私は何のために…」
「…やっぱり姉さん達の言うとおり、提督さんは嘘つきだったんですね…」
!?

「はい、実は私も姉さん達と一緒に捕まってたんです」
「姉さん達は言ってました、司令官さんは最低の嘘つきで、
私達の事は消耗品としか思ってないって…」
「私はどうしても信じられず、ここに帰ることを許され、そして確かめに来ました…」
ぐすっ
ミルンン…

「でも、わたしが間違ってました、姉さん達の言うとおり、
私がいるべきなのはここではなくあの方の下だったんですね」
「私は…羽黒は、あなたの艦娘をやめて、あの方の…ご主人様の艦娘になります」
キーン

「んんっ、これが姉さん達が言ってた新しい私…ちょっと恥ずかしいですけど、とっても素敵です♥」
「あの、司令官さん？私、たった今あなたを裏切ったんですよ？それなのにどうしてオチンポビンビンにしてるんですか？」
「ふふっわかってます♥女の子を騙して犯しちゃう司令官さんは女の子に裏切られても興奮しちゃう変態さんなんですよね♥」
「それなら最後に素敵な思い出をあげます♥」
ニコッ♥

「んんっ、入りました♥あの、どうですか？羽黒の膣は？」
「実は捕まってる間にご主人様にこんなにエッチな形に変えられちゃったんですよ？」
「それでも私は司令官さんのために頑張ってたのに…でももうどうでもいいですね♥」
「では動かしますね♥」
ぞく
ぞく
ぢゅっぷ♥

はあんっ♥
あんっ♥
パンッ
パンッ
パンッ
パンッ
「あんっはぁんっ♥気持ちいいですよ、ほら司令官さんも腰を振ってください♥」
「最後なんですから、ちゃんと楽しんでくださいね♥」
「ほら、膣でピクピクしてもう出ちゃいますよ♥」

「はあぁぁぁんっ♥出てます、私の中に…」
「はあっはあっ、どうでした、楽しめました？ふふっよかったですね♥」
「では…私はご主人様の所へ帰りますね、さようなら、最低の司令官さん♥」

「不幸だわ…今日もまたするの、
毎日毎日発情したサルみたいに私を犯して」
「いくらやっても無駄ってわからないのかしら？
私が姉さま以外の相手に感じるわけないじゃない！」
ビィィィン

「なにこのヌルヌルした液体？」
「うそっ！？体がだんだん熱く…」
「えっ、この状態で挿入るですって！？この卑怯者！」
陥落。
ビクッ
ビクッ
ビクッ

「んはぁああんっ！にゃんで！？
にゃんでこんなに気持ちいいの！？」
「いや、ダメッ！うごかにゃいでー！！！」
「ああぁあんっ、私の中でまた大きくにゃってる！！」
ぞくぞくっ♥
ぞくぞくっ♥
ぞくぞくっ♥
じゅぷっ
じゅぷっ
じゅぷっ

「はぁぁぁぁん!!!!」
「ああっ中で出てる…なにこの満たされてる感じ…」
「まるで姉さまと一緒にいる時みたいな幸福感…
うんうん、それ以上かも…」
ドクドクッ
ドクドク

「えっあなたに忠誠を誓えば姉さまと一緒に
この快楽を共有できる？」
「でも、姉さまには提督が…」
「姉さまを提督から奪い返す為に力を貸す？…でも…」
ハアッ♡
ハアッ♡
ハアッ♡
ボォー！…
トロォ…

「……わかったわ、姉さまを取り戻すためなら、私何でもするわ」
キュン…
「あなたに忠誠を捧げます」

「ああ、変えられてゆく…私の中から…」
「でも、これでいいのよね…これで姉さまとまた一緒に…」

「ああ、姉さま、姉さま、姉さま♥」

「…これが新しい私…ふふふ、うふふ、ふふふふふ…」
「ええ、最高の気分よ♥
これなら…欠陥戦艦とは言わせないし…」
「姉さまも喜んでくれるかしら♥」
「あら、またするの？ふふふ♥
いいわよ忠誠を誓ったんですもの、
好きなだけ使って、ご主人様♥」

「あん、はぁあん、あぁん♥すごい気持ちいい！」
「早く姉さまにも、この快楽を教えてあげたい♥」
「あんな、貧弱な提督と一緒にいるよりも、
私達と一緒にいるほうがずっと気持ちいいって♥」
パンッ
パンッ
パンッ
パンッ
あんっ♥
やぁんっ♥
「あぁん♥中でまたオチンポが大きくなってきてる♥
んんっ今度は私の体にかけて♥」

「あああぁあん♥熱い…それに臭いも素敵♥」
「ふわぁ♥今私、全然不幸じゃないわ♥
ううん、それどころか、堕ちるのが
こんなに気持ちいいって知れて最高に幸せよ♥
「ふふふ、うふふ、ふふふふふ♥
待っていてくださいね姉さま♥
すぐに私が助け出して差し上げます♥」

「お久しぶりです、提督♥」
「もお、提督は榛名のオモチャなんですから勝手に逃げちゃダメですよ？」
「ご主人様が他の娘を調教中に、榛名が暇になっちゃうじゃないですか」
ニヤ
ニヤ

「え？もうこんな事はやめて昔の榛名に戻ってくれですか？」
「ん～、では提督、榛名と勝負をしましょう♥」
「提督がもし榛名の足コキを我慢して射精しなければ提督の勝ちです、
元の榛名に戻ってあげます」
「でももし射精してしまったら、
そうですね…逃げ出した罰として
金剛姉さまをご主人様に差し出していただきます♥」

「では始めますね♥提督に拒否権はありませんよ？」
「フフッ相変わらず粗末なおチンポですね、ご主人様とは大違いですね」
「ほら、最初は手加減してやさしくコスってあげますね♥」
「あら、まだ始めたばかりなのに亀頭から先走りがあふれてますよ？」
すりっ
すりっ

「そろそろ、激しくしちゃいますね♥」
「どうですか、気持ちいいでしょう、提督これ好きですもんね？」
「もう出ちゃいそうでしょう？いいんですいつもみたいに無様に射精しても♥」

「フフッなかなか頑張りますね提督♥
いつもだったらとっくに射精してしまってるのに」
フフッ♡
「そんなに金剛姉さまを渡したくないですか？」
「そうですよね、提督は私達姉妹を特に大事にしてくれましたもんね♥」
「あっ榛名いい事を思いつきました！」

「頑張っている提督に御褒美です♥」
「提督が好きだった頃の榛名の姿でお相手して差し上げます♥」
オオオオオ

「どうですか、懐かしいでしょう？」
「提督のおチンポもピクピクして喜んでくれてますね♥」
「今度は手加減しませんよ？それでは榛名！全力で参ります♥」

「全身ビクビクして、「可愛いです♥」
ふふっ♥
「んっ？そんなに榛名のパンツが気になりますか？」
「榛名のおマンコはご主人様専用ですが、見るだけなら大丈夫です♥」
「ほら、榛名のパンツを見ながら足コキでイッてください♥」
提督が一生触れることの無い部分を見ながらピュッピゅしちゃってください♥」

「フフッとうとう射精しちゃいましたね？」
「あはっ、暖かいです♥」
そくっ♥
そくっ♥
「この勝負は榛名の勝ちです♥
では提督、約束は守ってもらいますよ？」
「金剛姉さまをご主人様に差し出してください♥」
ビュルルッ
ビクッ
ビクッ

「フフッ金剛姉さま可愛そうに、
大好きな提督に裏切られて他の男に犯されるなんて♥」
ニヤ
ニヤ
「でもすぐに、金剛姉さまも気づくはずです♥
こんな粗チン提督より、極太おチンポな
ご主人様のほうが何倍もすばらしいと♥」
「あら、泣いちゃってるんですか提督？
そうですよね、金剛ねえさまを裏切りたくはないですよね？」
「でも約束を破ったらわかってますよね？て・い・と・く♥」
ドロロォ…

「あら～提督、起きちゃったんですか？」
「何をしてるかって、決まってるじゃないですか～よ・ば・い♥」
「うふふ、お子様な提督にはまだわからないかしら♪」
「でしたら、私が教えてあげますね～♪」
がば。

「ほら提督、私とベロを絡ませましょ♥」
「れろ、れろっ……じゅっぷ、じゅる……れろっ！
れえ～ろ……れろろんっ、れえろん、ちゅぱっ」
グチャ
ベチャ
「んっ、んはぁ…うふふ、どうですか？これが大人のキスですよ♪」
「うふふ、では次におちんちんを出しましょうね～」

「あはっ♪提督のおちんちんさん、皮被ってて恥ずかしがりやさんですねぇ♥」
「それでは入れちゃいますよ～♪」
「え？どこに入れるかって？うふふ♪さあ？
スカートに隠れて見えないから私のどこに挿入るのか見えないですね♥」
フー♥
フー♥
ボロ～

「あはっ♪入れちゃいましたよ～、グチャグチャで気持ちいい？」
「天龍ちゃんはこんな気持ちいい事してくれないでしょ？」
「でもこれだけじゃないのよ♪
この状態で腰を動かすと、頭バカになるくらい気持ちよくなっちゃうのよ～♥」
「どうです、動いてほしいですか？うふふっ、でもダーメ♪」
「提督が私の言うことに逆らわないなら、
たーくさん気持ちよくしてあげますよ～♥」
ゾクッ♥
ゾクッ♥
ズブッ

「あはっ♪これで私が提督のご主人様ですね♥」
「うふふっ♪では私の奴隷ちゃんになった
提督には私の秘密を見せてあげるわね～♥」
ニヤ
ニヤ

ズズズズ
「ほら、段々私の姿が変わってきたでしょ？」
「私のご主人様がくれた新しい姿なの♪」

「あはっ♪どう、ステキでしょ？」
「うふふっ、せいか～い、
私は提督の知らないところで改装されちゃったのよぉ、これが私の秘密♥」
「それでは、私の奴隷ちゃんになった提督に一つ目のめいれ～い♪」
アハッ♥
「私がいいって言うまで射精しちゃダ～メ♪」
「あはっ♪逆らおうなんて考えちゃだめよ？
もし逆らったら頭と体がバイバイしちゃうからね♪」

「じゃあ、腰を振るわね♥んっ、あんっ、うふふふっ♪」
「私の中でず～とピクピクしてる♪出したい？楽になりたい？」
「でもいいの？私はまだいいよって言ってないけど、それとも…死にたい？」
「あはっ♪泣いちゃってか～わいい♥そうよね、死にたくないよね♪
だったらほら、ガンバレ、ガンバレ♪」
ゾク♥
ゾク♥
ぐっちゅ♥
ぐっちゅ♥
ぐっちゅ♥

「あはっ♪提督のおちんちん、私の中で元気にはねてますね♪」
「うふふっ♪では二つ目の命令です♥
いまから天龍ちゃんをココに連れてきますので、
天龍ちゃんの前で私とエッチしてくださいね♥」
「大好きな提督を目の前で寝取られて、
泣いちゃう天龍ちゃんの姿が今から楽しみですよねぇ？」
「もし逆らったら提督はどうなっちゃうのかしら♥うふふふっ♪」

ガチャッ
ガチャッ
「最低ね、こんな鎖をつけないと女の子一人まともに相手に出来ないなんて」
「なんと言われても、あなたの仲間になる気はないわ！」
「早く私と提督を開放しなさい！」

「ひゃっ！？な、なにそんなモノをこすり付けてるの！？」
「仲間にならないならこれを私のお尻に入れるですって？」
「…好きにすればいいわ、でも絶対に私はあなたなんかに屈したりしないわ！」
サスサス
ずりずり

「んっんんんぅ！！！！」
「こっこの程度？たいした事…んっないわね」
「んっ、あんっ…こんな事で私が提督を裏切るはずがないでしょ、諦めなさい！」
「えっなに？中でビクビクして…まさか！？」
「や、やめ……」

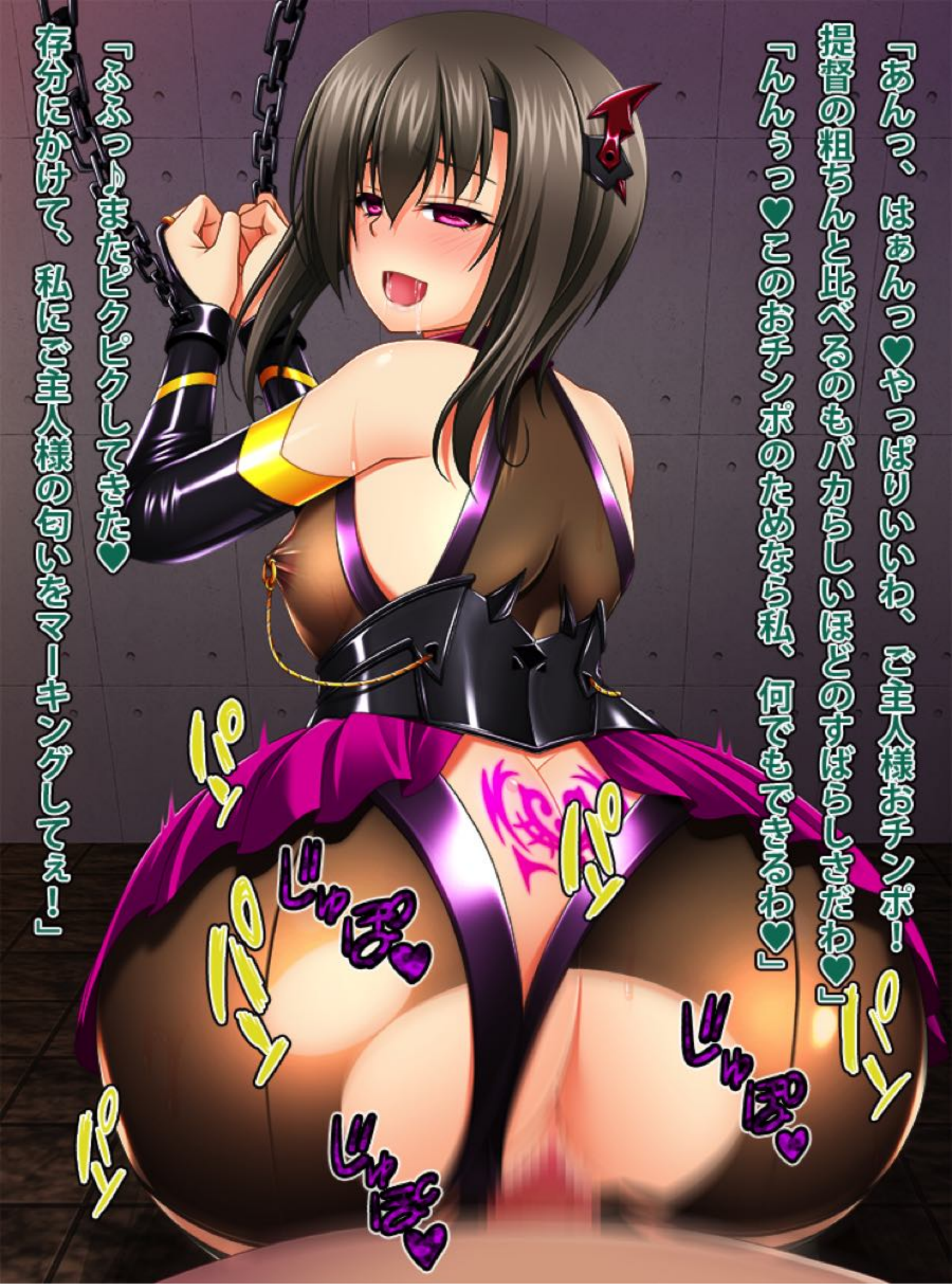
「ひゃあああぁん！」
「ああ、本当に中に出されて…でも提督…私耐え切ったわ…」
「ふぇ？耐え切った褒美に洗脳を解いてやるですって？あなた何を言って…」
ビクッ
ビクッ
ビュルルルル

「えっ？…あ、あ……」
「……」
「……ふふっ♪」
キイイイイイ

「作戦完了、大鳳帰投しました。ご主人様♥」
「ごめんなさい、提督の居場所も作戦の内容も
ご主人様に教えたのはこの大鳳なんです♥」
「ふふっ♪まだわかりませんか？
いままで、あなたのそばにいたのは
きゅん♡
きゅん♡
ご主人様に調教される前の記憶に戻された私♥」
「提督は警戒心が強いですから、
怪しまれずに誘導するのはこの手が一番だって、私がご主人様に進言したのよ？」

「まだ信じられない？そう、それなら見せてあげるわ♥」
キーン

「どう？これが本当の私♥」
「ふふっ♪今提督、絶望しきってとってもいい表情してるわね♥」
ふふ…
「私興奮してきちゃったわ♥ねぇ、ご主人様？
今度は私のオマンコに入れてもらってもいいかしら？」
「このおバカさんな提督に、私が誰のモノかをしっかり教えてあげないと♥」
きゅん♡
きゅん♡


「あんっ、はぁんっ♥やっぱりいいわ、ご主人様おチンポ！
提督の粗ちんと比べるのもバカらしいほどのすばらしさだわ♥」
「んんうっ♥このおチンポのためなら私、何でもできるわ♥」
「ふふっ♪またピクピクしてきた♥
存分にかけて、私にご主人様の匂いをマーキングしてぇ！」
パン
パン
パン
パン
じゅぽ♥
じゅぽ♥
じゅぽ♥
じゅぽ♥

「はあああぁぁぁん♥♥♥」
「ああ…いい匂い♥私のお尻、ご主人様に真っ白に染められちゃったわ♥」
「ふふっ♪これでおバカさんな提督も理解したでしょう？
私がもうあなたの艦娘じゃないって♥」
びくんっ♥
びくん♥
「でも安心して、提督にはまだ大事な仕事が残ってます♥
そう、皆さんの訓練の的として♥フフフ♥」

「失礼します、雲龍ただいま鎮守府よりもどりました」
「ええ、ご主人様がお風呂にいると聞いてそのまま来ました」
「ご命令どおり我が鎮守府の提督は私が篭絡しました、
これであの鎮守府の艦娘達はご主人様の所有物です」
プル♡
むぎゅ♡

「御褒美にご主人様の体を洗う任務を与えてもらえるの？ううん、うれしいわ♥」
「そうね、ではまず乳首を私の舌で洗うわね♪」
「あーん、れろ、れろっ……れろっ！　れえ～ろ……れろんっ、れえろん」
「んっ♥うふふっ私の膝裏で、ご主人様のオチンチンが構って欲しそうにピクピクしてるわね、カワイイ♥」
「でも、その前に♥」
レロレロ
ビクッ
ビクッ

「どう、気持ちいい？ローションと私の体を使ってご主人様を綺麗にするわね♥」
「んっ…んっ、ヌルヌルを私のオッパイスポンジで伸ばしてっと、この洗い方私も気持ちよくて好きよ♥」
「あっはんっ♥やっぱりご主人様の体はいいわ♪提督の華奢な体じゃ物足りないもの…」
ドロォォ…
「えっ？どうやって提督を篭絡したかですか？そうね、たとえばこんな感じで」

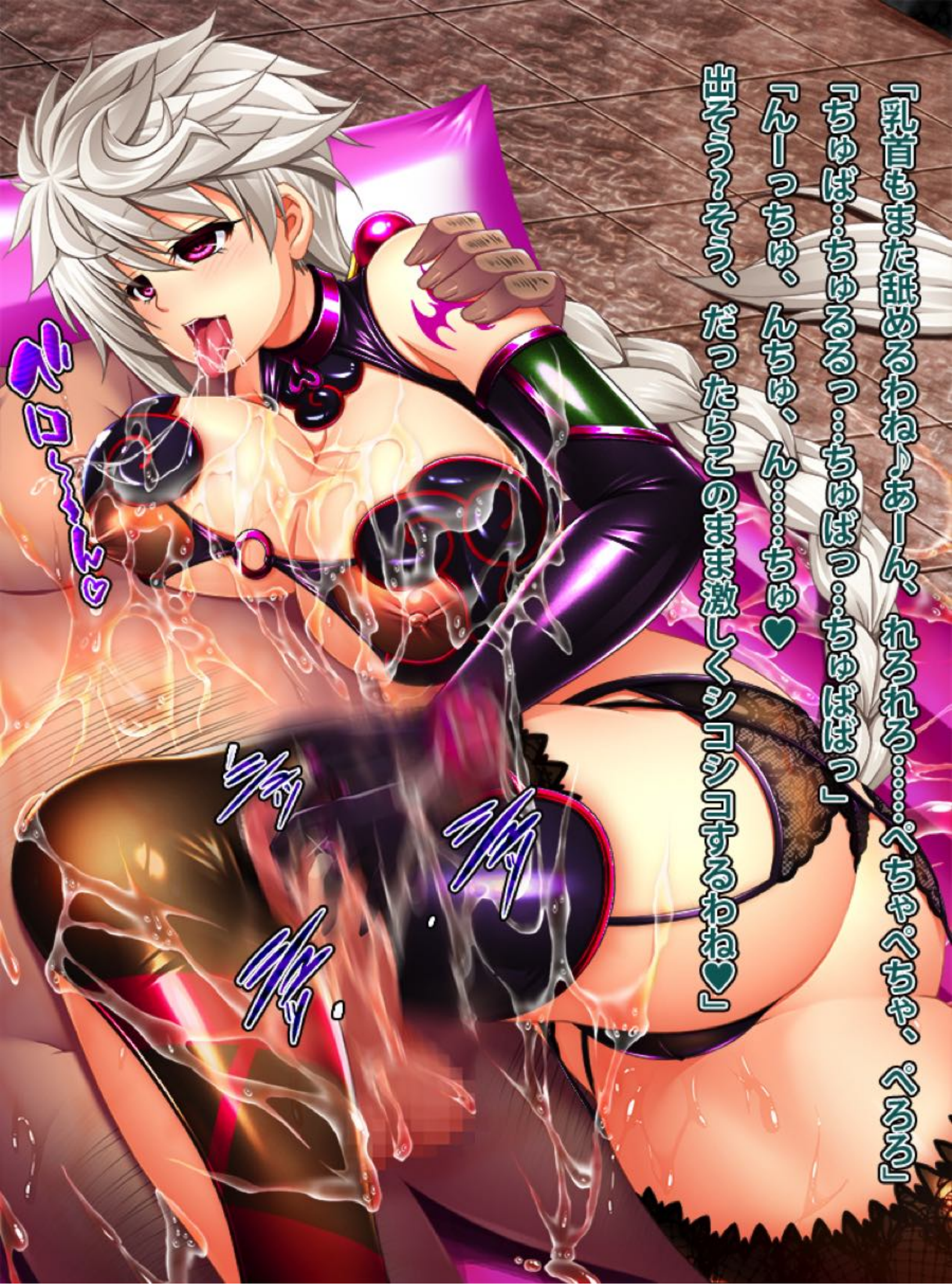
「鈴口だけを刺激して何時間も射精を我慢させたり、
逆に射精させ続けてイキ狂わせたり♥」
「おかげで、私の言うことは何でも従ういい子になったわ♪
もちろんオマンコには入れさせてないわ」
「だってココに入れることが出来るのはご主人様ただ一人だけよ♥」
カリ
カリ
ビクッ
ビクッ

「あっそういえば、鎮守府から帰投して
そのままだったから前の格好のままだったわね」
「そう、この格好でもいいの？でも折角貰った姿だから、
あっちでご奉仕したいわ」
「それにあっちのほうが、ご主人様の所有物って感じで好きよ♥」

「この甘い刺激、やっぱりホッとする」
「私の帰る場所はココなんだって気持ちになっていいわ♥」
イイイイイイ

「うふふっ♪やっと私本来の姿になれたわ♥」
「やっぱり、この格好のほうがご主人様も興奮するでしょ？」
「さっきよりもオチンチンが暴れてるわ♪」

「それじゃあ、ずっとお預けになってるオチンチンもシコシコするわ♥」
「もちろん他のところのご奉仕も…ね♥」
「んっ…あっ…あんっ…♥オチンチン、私の手の中ですごく気持ちよさそう♥」
「私も乳首が擦れて…あんっ♥」
ぬるぅ～…
シコ
シコ


「乳首もまた舐めるわね♪あーん、れろれろ……ぺちゃぺちゃ、ぺろろ」
「ちゅば…ちゅるるっ…ちゅばっ…ちゅばばっ」
「んーっちゅ、んちゅ、ん……ちゅ♥
出そう？そう、だったらこのまま激しくシコシコするわね♥」
ぺロ～～ん♡

「んっ、あはぁんっ♥暖かい……♥」
「うふふっ♪体を綺麗にするつもりが逆に汚れちゃったわね♥」
「でも、いいじゃない…何回でも私が綺麗にしてあげるわ♥」
「でも、次はご主人様のオチンチンで
私のオマンコを綺麗にしてもらえないかしら？」
ゾクッ♥
ゾクッ♥
びゅるッ
ビクッ
ビクッ
キュン
キュン
「うふふっ、うれしいわ♪ずっとそばに居ますから、
好きなように私達の体を使って……ね♥」

「て・い・と・く、捕まえました♪もお、ダメですよ？
私に黙って上層部の人に電話をかけようとしちゃ？」
「そんなことよりいつもしてる、気持ちいい事をしましょう♥」
「ほら、おちんちんをお手手でシコシコしてあげます♥」
ぷるん♥
かあ～～

「シ～コシコ♪シ～コシコ♪どうですか？気持ちいいですか？」
「やんっ♥提督がかわいい顔をするから
私もおっぱいからミルクが溢れてきちゃいました♪」
「ん、飲みたいですか？うふっ♪いいですよ、
いつもみたいにおっぱいちゅーちゅーしてくださいね♥」

「ふふっ♪提督ったらまるで赤ちゃんみたいに
必死にオッパイ吸っちゃってかわいい♥」
「ママのおっぱいミルクはおいしいでちゅか？
そうでちゅよね、提督はママのおっぱい大好きですもんね♥」
「ほら、おちんちんもママのお手手の中でピクピクしてまちゅよ？」
ギュッ
ちゅぱ
ちゅぱ
シコ
シコ

「はい、ストップ♪ふふっちょっとお・あ・ず・け♥」
「提督はさっき電話をかけようとしてましたよね？
ご主人様や私たちのことを偉い人に話すつもりだったんですか？」
「ふふっ♪嘘はダメでちゅよ？嘘ついたら、
もう提督にはシコシコもおっぱいミルクもあげません♥」
「うんうん～やっぱり密告するつもりだったんですね、
提督は悪い子でちゅね♪」
クスッ

「でも、正直に言えたいい子にはご褒美♪」
「さっきよりももっと気持ちいい事をしてあげます♥」

「ふふっ♪どうでちゅか？とってもエッチな格好になりましたよ♥」
「おっぱいミルクもさっきより量が増えて味も濃くなってます♪
いっぱい吸ってくださいね♥」
アハッ♥
ドロォ…

「どうです？とってもおいしいでしょう？」
「もう、ママが居れば他に何もいらないでちゅよね？」
「いいんでちゅよ、いつでもママに甘えてくださいね♪」

「ほら、またおちんちんもシコシコしちゃいますね♪」
「シ～コシコ～♪シ～コシコ～♪」
「あんっ♪提督、いくら気持ちいいからって
乳首噛んじゃダメですよ？めっ！」
あん♡
ガリッ
ぐちゅぐちゅ♡
ぐちゅぐちゅ♡

「もうイキたいでちゅか？ん～どうしましょう…」
「じゃあ提督がもうごしゅ…パパとママを裏切らないって
お約束するならお射精してもいいでちゅよ？」
「はい！緒に、『僕はパパとママを裏切りません』」
「よく言えました♪じゃあいっぱいお射精しちゃいましょうね♪
ぴゅ～、ぴゅ～♥」
ちゅうう
ぴゅぴゅ♥
ぴゅぴゅ♥

「あはんっ♥いっぱい出ましたね♪」
「気持ちよかったでちゅか？ママも提督がちゃんと
お約束してくれたのがうれしくておっぱいミルクが
いっぱい出ちゃいました♥」
「もしまたお約束を破ったら、
ママ本当に怒って提督の事を捨てちゃいますからね♥」
どくっ!!
どくん
プリンシャアアイ♡
ごくっ…
ごくっ…
ぐぎゅる。

プ「あ、おはようございますアドミラールさん♪」
ビ「あら、意外と早く起きたのね」
プ「え、何しに来たかですか？そんな言い方ひどいですよ？」
ビ「そうよ、私達はただ貴方を裏切って捕虜にしただけじゃない？」
ビ「それにココに来たのは何も拷問をしにきたわけではないのよ？」
プ「そうですよ、私達はご主人様の命令でアドミラールさんにご奉仕しにきただけなんですから♪」

ビ「そうよ、ご・ほ・う・し♪
貴方を絞り殺せたらご主人様がご褒美をくれるんですって♥」
プ「今回はどんなプレイをしてもらえるのか、
楽しみですねビスマルク姉さま♪」
ビ「ええ、想像しただけでおマンコがグチョグチョにぬれてきちゃうわ♥」
プ「そういう訳ですから、アドミラールさんは
出すもの出してさっさと死んでくださいね♥」
ニャ♥

ビ「あら、大きさだけは立派じゃない？」
プ「まだ何もしてないのに、もうビンビンですね～」
ビ「フフッ、これが今から私達の口で犯されるのよ？楽しみでしょ♪」
プ「人生最後の快楽、しっかり味わってくださいね♥」
ぺろっ
ボロン

ビ「じゃあ最初は私から、あ～んっじゅぼぼぼ、ジュ、ジュルル……ぶぼっ！」
プ「わー、ビスマルク姉さま、最初から容赦ないですね♪では、私はこのタマタマを舐めますね♥れろ、れろっ…じゅる……れろっ！」
ビ「ちゅぱぱっ、ジュボジュボジュボッ、ちゅるるっ、んふふっ♪私はビスマルクよ？容赦なんてするわけ無いじゃない♪」
プ「れろっ……れろ、あむっ♪さすがです！ビスマルク姉さま♥」
ぬるっ
れろっ
れろっ
ずぼ♡
じゅるるるるっ
ずぼ♡

プ「どうですか、アドミラールさん？
ケッコンまで考えてたビスマルク姉さまにこんなにしてもらえて♥
最後の思い出としては最高ですよね♪」
ビ「れろろんっ、れぇろん、ちゅぱっ……そうゆうプリンツこそ、
こいつの事を気に入ってたんでしょ？」
プ「もぉ、イジワルしないでくださいよ～、
今の私はご主人様とビスマルク姉さまさえいれば、
こんなのいらないんですから♪」
ビ「私だってそうよ～ご主人様の命令じゃなければ
こんなヤツに奉仕なんかしないわ！という訳でプリンツ、代わって頂戴？」
プ「了解です♪アドミラールさん？
次は私、プリンツ・オイゲンがご奉仕しますね♪」
ちゅぱぁん

プ「あ～む、ちゅる、ぢゅるるるっ、ちゅっぼっっっ、ちゅっぢゅっ、じゅぞぞぞぞっ！」
ビ「あら？貴方もなかなかやるじゃない♪その下品にむしゃぶりついてる顔、とっても可愛いわ♥」
プ「ジュッ、ジュッ、じゅるるっちゅ、えへへっ♪ビスマルク姉さまに褒められちゃったぁ♥」
プ「じゅぼっ、じゅぼっ、じゅるるるるっ！ちゅっ、ちゅるるぅっ！…ふはぁっ、はい、次はビスマルク姉さまの番ですよ♪」
ジュボ
ジュボ
キュン
ちゅるるる

ビ「しょうがないわね、はむっ、ちゅる、ぢゅるるっ、ちゅっぼっっっ、ちゅっぢゅっ、ぢゅぼるるっ、じゅるるっちゅ、じゅぼっ！」
プ「わぁ！ビスマルク姉さまもとっても下品な顔♪とってもステキです♥」
ビ「んちゅ、ちゅ……ぢゅぱっ、あたりまえじゃない。良いのよ？もっと褒めても、ちゅぱっ、ジュポジュポジュポッ！」
ビ「ん、何出そうなの？……いいわ、特別に私達の口に出すことを許可してあげる、ほら、さっさと出しなさい！」
ギュポ
ぢゅるる～
ぢゅるるレ
ぢゅーーーるるるるる～～～る
ビュオ
ビュオ

ビ「んっん～～っ、れぇ～ろ……れろんっ、れぇろん……ちゅぽんっ！」
ビ「はむはむっ……うん、不味いわね、とても人の口に入れられるものではないわ…」
ホォー…
ビ「例えるならそうね…腐ったチーズみたいな感じよ」
プ「そんなに不味いんですか？逆にちょっと気になります♪」
ゴクンッ ゴクッ

プ「では私も、あ～むっ、んー、ほお、ほおほお、なるほどねぇー」
プ「確かに不味いですね…
こんなモノを後何回も出させないといけないとなると、憂鬱ですね」
ちゅるるちゅるる
ゴクゴキ
ビ「ええまったく、どうして同じ精液なのに
ご主人様とここまで違うのかしら？」
プ「あ～あ、早く死んでくれないかなぁ？
そしたらご主人様のご褒美で口直しできるのに♥」
チッ

ビ「じゃあ、とっとと再開しましょ、こんなのにいつまでも私達の貴重な時間を使いたくはないわ」
プ「え？休ませるわけ無いじゃないですか♪とっとと出し尽くして死んでくださいね～」
プ「あっでも、もう私達の口の中には出さないでくださいね♪もうあんな不味い精液飲みたくはないですから♥」
ビ「ええ、もし飲ませたら絞り殺す前に私が消し炭にしてあげるわ！」
プ「さすがです！ビスマルク姉さま♥」
ニヤニヤ
クスクス

REC
「チーッス！提督、見てる～？」
「ご主人様の気まぐれで生かされてるんだから感謝してよ♪
私としてはあそこで死んでくれてもよかったんだけどね♪」
「そんな提督にスペシャルサプライズ♪
今からこの鈴谷専用の整備員達とパコるところを動画にするから
存分にシコッてね♪」
いえーい♡
「生かしてやった上にオカズまで上げるなんてご主人様超優しいよね♥」
「さあて、そろそろはじめよっか♪」

REC
「んぉ、みんな今日も元気でいいね～♪」
「じゃあまずは手コキとマンコキで一発イカせたげる♪」
「それシ～コシコ、どう気持ちいいっしょ？
鈴谷は足だけじゃなくて手もマンコも扱いは超一流なんだ☆」
「提督はもう鈴谷のどこも使えないから、
あの時足コキで絞り殺されてたほうが幸せだったかもね♪」
ボロ…

REC
ニヤ
ニヤ
「んーやっぱ、ちんたらするのは鈴谷の性に合わないな～…」
「にししっ♪それそれ～やっぱこのくらい激しくしないと盛り上がらないよねぇ♪」
「え～なに？激しすぎるって？そんなの鈴谷が知るわけ無いじゃん♪」
「みんなは鈴谷の玩具なんだから、どう扱おうが鈴谷の勝手でしょ？」
「でもでも～鈴谷はやさしいから、射精するタイミングはみんな好きにしていいよぉ♪」

「うわっ、言ってるそばからいっぱい出たじゃん♪」
「ほぉーぅ、やっぱ三人分だから一発で体中がヌメヌメするぅ♪」
「ふひひっ♪雄臭くていい感じのザーメンじゃん♪
でもまだ鈴谷は物足りないから続きしよっか♥」
びゅー
びゅー
びゅるッ
REC
「それとキミ!そーそ椅子のキミ、一番ザーメン多かったからご褒美♪
鈴谷のマンコに入れていーよ♥」
「あ、でも中で出すのはダメだかんね?中で出していいのはご主人様だけだから♥」

REC
「はぁ～、気持ちいい♪長さも結構いい感じだし、
これからキミには鈴谷のおマンコを担当してもらおうかなぁ？」
あん♡
「ほらほらぁ、他の二人も頑張らないと、
ずぅ～と手コキ係りからランクアップできないよぉ♪」
「じゃあまたおちんぽシゴくからみんながんばってね♥」
ずぽん♥

REC
「んっ、んっ、やっぱ鈴谷をえっちな目で見てた連中をこうやって好き勝手にするのはテンションがあがるねぇ♪」
「ほら、ザーメンがローションみたいにヌメヌメ滑ってきもちいいっしょ？」
「鈴谷がこんなにしてあげてるんだからさっきよりいっぱい出さないとゆるさないかんね♪」
「ふひひっ、提督も早漏じゃなければ鈴谷の足コキ担当奴隷くらいにはしてあげたのにね♪」
シコ
シコ
シコ
シコ
くちゅっ♡
ちゅるふっ♡
くわぱ♡

REC
「んぁ？そろそろみんなイキそうな感じ？じゃあ、ラストスパートかけるからみんな一斉にだしてね♥」
「ほら、手も腰も激しくしちゃってるからみんな体がピクピクしちゃって、かっわいい♪」
「気持ちよすぎて頭もぼーっとしてるっぽいけど聞いてる？イク時はみんな「イクッ」っていいなよ？」
ずちゅ♡
ずちゅ♡
ぐちゅ♥
パン
パン

REC
ビクビクッ
ぶるるる
ビュルル♥
「あぁんっ!?あーあ、やっぱり聞いてなかった…みんな『イクッ』って言ってないし」
「しかも椅子のキミ、鈴谷さっきいったよね?
『中で出していいのはご主人様だけ』って…」
「はぁー、テンション下がるぅ…ちょっとカメラ止めて」

「ねえ、誰が鈴谷のおまんこに中出ししていいって言ったの？言ってないよね？」
「椅子の分際でなに調子に乗ってるの？
鈴谷の言うこと聞けないゴミは要らないんですけど？」
「ねえ、聞いてる？ごめんなさいは？ほら、ご・め・ん・な・さ・い？」
「…あ～あ、喋んなくなっちゃった」

どん!!
ドガッ
ボキッ

「よし！気分を切り替えてご主人様をパコってこよ♥」
「ご主人様の極太おちんぽなら、こんなキモイザーメンすぐに掻き出してもらえるし♥」
「あ！二人とも、それ、もう要らないから片付けといてねぇ♪」

ブツンッ

「うふっお久しぶりです提督♪」
「どうしたんですか、元気がありませんね？ああ、そうでした！」
「私が性欲処理の肉バイブとしてプレゼントしたのに、
みんな飽きてしまって誰にも見向きもされなくなっちゃったんでしたね♪」
「クスクス、可愛そうな提督♪」
フフッ♡
ぷにぷにん

「そんな可愛そうな提督に、ご主人様が特別にその隣の部屋が見える特殊な部屋を用意してくれましたよ♪」
「よかったですね♪提督の元部下達がご主人様に可愛がられるのを毎日そこで見れるのですから♥」
「これで、その使い道の無くなったダメおちんぽをシゴくオカズに困ることはなくなりましたね♪」

「最初は私とご主人様のラブラブセックスを見せてあげます♪」
「ほら、見えますか？私の太ももで挟んでるご主人様の極太おちんぽ♥」
「これが今から私のオマンコをズボズボ犯して、
子宮が破裂するくらい精液をどぴゅどぴゅ出してくれるんですよ♥」
「提督は何も出来ずただ見てるだけ♪
唯一できることは一人でシコシコオナニーをすること♥クスクスッ無様ですね♥」
「では始めましょう、ご主人様♥」
ずぼっ

「はあぁんっ♥まだ入れただけなのにイッちゃいそうになりました♥」
「さすがご主人様♥そこにいる誰かさんとは大違いです～♪」
「んんっ♥私のことは気にせず動いてください、ご主人様の喜びが私の喜びですから♥」
ゾクッ♥
ゾクッ♥
ずっぷぷぅぅ♥

「あんっ、はあんっ、あぁんっ、激しいですご主人様♥」
「突かれるたびに、私の子宮がご主人様の赤ちゃん欲しくてキュンキュンしてます♥」
「私ももっと気持ちよくなってもらうために、オマンコを締め付けちゃいますね♥」
あんっ♡
やぁん♡
「やんっ♥おちんぽが私の中でビクビクしてきました♥
ふふっいっぱい出してください、私を孕ませてください♥」
パンパン
パンパン

「はあぁあぁん♥♥♥ご主人様の特濃精液が私の子宮に来ました♥」
「んんっ、量が多すぎてオマンコから溢れてきちゃいました♥」
キュン
キュン
「はあぁっ幸せです、ご主人様♥」
「あっそうでした！」
とろ～…

「ごめんなさい、ご主人様とのラブラブ子作りが気持ちよすぎて提督の存在を忘れるところでした♥」
「どうでしたか、楽しんでもらえましたか？ふふっ良かったですね～♪」
「あんっ、さすがご主人様♥私の中でもう大きくなってますね♥」
「良かったですね、提督♪また私の乱れるところを見れますよ」

「あぁんっ、はぁあんっ、やぁんっ、
ご主人様の精液ですべりが良くなって気持ちいいです♥」
「音もやらしくジュボジュボいってますし、
さっきよりもやらしくなって提督もうれしいでしょう？」
「でも、見てるだけじゃやっぱり我慢できないですよね？」
「そんなかわいそうな提督には、特別サービスです♥」
ぐにゅ♥
ぐにゅ♥
ズプッ
ズプッ
グチュッ
ピンッ
ピンッ
ピンッ

「私は口を開けてますから、おちんぽをこすり付けてフェラされてる気分を味わってください♪」
「ほら、ご主人様に激しく突かれてぷるんっぷるんっしてるおっぱいも触ってもいいですよ？全部壁ですけどね、クスクスッ♪」
「早くおちんぽ擦りつけないと、ご主人様が先に出したら今日の、この場所でのエッチは終わってオカズがなくなっちゃいますよ？」
「ほらほら、ご主人様はもう出すみたいですよ、3、2、1、0♪」
ぱちょロメ
ぱくぱくぱくぱく
ズボッ
ズボッ
ズボッ
ぱん
ぱん
ぱん

「んはあぁあんっ♥♥♥二回目なのにすごい量です♥子宮が破裂するかと思いました♥」
「はあっはあっ、フフッよかったですね提督、射精が間に合って♥」
「私に顔射した気分にはなれましたか？
クスッではその壁は自分で綺麗にしといてくださいね♪」
ビュルル♥
ゴポォ…
ビュッ…
ビュル…
「汚いままにしておくと、明日の浦風の番によく見えないともったいないですよ♪」
「では、私達は場所を移動して続きをしますね♥」